



東京女子医科大学学術リポジトリ
<https://twinkle.repo.nii.ac.jp>

(シンポジウム「輝く女性が未来を創る女性医療の最前線」)華麗なる加齢のために～女性の生涯にわたるQOLの維持・向上を志向した女性医学とは

著者名	松 潔
雑誌名	東京女子医科大学雑誌
巻	89
号	4
ページ	99-99
発行年	2019-08-25
URL	http://hdl.handle.net/10470/00032381

doi: 10.24488/jtwmu.89.4_97(https://doi.org/10.24488/jtwmu.89.4_97)

http://www.seikatubunka.metro.tokyo.jp/danjo/danjobyodo/files/0000000929/jokatsu_full.pdf
(accessed July 16, 2019)

2. 女性特有の臓器—女性に多い疾患：乳がん—

(東京女子医科大学 乳腺・内分泌外科, 女性センター乳腺外科) 神尾孝子

乳がんは、日本女性における癌罹患率の第1位を占め、近年一貫してさらに増加する傾向を示している。2014年の国立がん研究センターがん対策情報センターの統計では、罹患率は116.5人/10万人で、罹患者数は年間76,257人と報告されている。

東京女子医科大学女性センター外来では、女性特有の臓器や女性に多い疾患、女性医師を希望する患者（女性）をスペシャリストの女性医師・技師が診療する体制を構築している。

女性センター乳腺外来では、乳がんをはじめとする乳腺腫瘍の診察のほか、早期乳がんの発見や乳がんの精密検査に必須である超音波検査や針組織生検、乳頭分泌液の細胞採取や分泌液中の腫瘍マーカーの測定、乳管内視鏡検査などの検査はすべて女性センターのある外来棟の同一のフロアで熟練した女性医師・技師が行っている。また、乳がんの治療に不可欠な化学療法や緩和ケアについても化学療法・緩和ケア科の女性専門医が女性センターでの専門外来を担当し適格な治療を行っている。近年乳がん領域においても遺伝子検査や、遺伝子に基づいた治療選択肢の重要性が増大しており、女性センター遺伝子外来において乳がんの遺伝について相談ができる体制を設けている。

今後、関連各科と連携し、さらに充実した診療体制を作っていきたいと考えている。

3. 華麗なる加齢のために～女性の生涯にわたる QOL の維持・向上を志向した女性医学とは

(東京歯科大学市川総合病院産婦人科, 慶應義塾大学医学部客員教授 (産婦人科学))

高松 潔

日本人女性は世界トップクラスの長寿であるが、幸福度では決して上位ではない。また、長寿も数年で韓国に追い抜かれるという推計もあり、日本における女性のトータルヘルスケアは喫緊の課題である。

これに対し、女性の quality of life (QOL) の維持・向上を志向して、近年、周産期医学・生殖内分泌学・婦人科腫瘍学に次いで確立された産婦人科の4番目のサブスペシャリティが女性医学である。女性に特有な心身にまつわる疾患を主として予防医学の観点から取り扱うことを目的とすると定義されているが、これまでの医療は目

の前の疾患・病態に囚われて、背景にある過去と起こりうる将来にまで配慮してはこなかった。例えば、多嚢胞性卵巣症候群では将来のメタボリック症候群の発症リスクが2倍になることや子宮内膜症に関連した不妊の既往がある女性では閉経が早いことを知っていれば、何らかの対応も可能となる。

実際の対応としては、ホルモン療法、特にエストロゲンを中心とした女性ホルモン投与が有用である。性成熟期の経口避妊薬 (OC) や低用量エストロゲン・プロゲステン配合薬 (LEP)、閉経後のホルモン補充療法 (HRT) などには、癌予防やアンチエイジングとしての効果も報告されており、日本においても製剤の選択肢が増えてきた。また、女性におけるエストロゲンレベルの変化はメンタルヘルスに関連することから、心身医学的なアプローチも重要である。

女性医学は各診療科を結ぶハブのような役目をしており、女性の診療には欠かせない視点である。本講演では、華麗に輝く女性が一人でも多くなることを期待して、女性医学の基礎知識から実際の対応までをお話してみたい。

4. 女性アスリートへの医学的サポート—無月経への対策と月経周期調節法—

(東京大学医学部附属病院女性診療科・産科女性アスリート外来) 能瀬さやか

女性アスリートに多い健康問題として「視床下部性無月経」, 「low energy availability (LEA)」, 「骨粗鬆症」が挙げられ、これらは『女性アスリートの三主徴』と定義されている。この三主徴を認めるアスリートでは、疲労骨折のリスクが高まることも明らかになっており、三主徴に対する医学的介入は障害予防の点からも重要となる。また、国際オリンピック委員会でも、Relative Energy Deficiency in Sport (RED-S) の概念を提唱し、男性アスリートも含む全てのアスリートにおいて、運動によるエネルギー消費量に見合った食事からのエネルギー摂取量の重要性について警鐘を鳴らしている。LEA による無月経に対する治療は、ホルモン療法が第一選択ではなくエネルギーバランスを改善することが重要な治療となる。

また、月経が規則的にきているアスリートにおいては、月経困難症や月経前症候群等の月経随伴症状への対策がコンディショニングを考える上で重要となる。近年、月経対策において(超)低用量ピル服用を希望するアスリートは増えつつあるが、ホルモン剤に対する誤解や副作用への懸念等もまだまだ多い現状にある。

本講演では、これまで実施してきた調査結果をもとに、女性アスリート特有の問題に対する現状とその対策法について紹介する。